

大君から浮舟への転換

— 浮舟の「形代性」と「反形代性」 —

辛 有美

『源氏物語』は、既に多くの指摘がなされているように、物語の冒頭から末尾まで「形代」の論理を貫いている。藤壺中宮が桐壺更衣の形代であり、紫上が藤壺中宮のゆかり、浮舟が宇治の大君の人形であることは従来の研究で繰り返し述べられてきた。特に浮舟は、薫の視点から大君の「形代」「なでもの」として把握されるばかりでなく、匂宮にとっても中君の「ゆかり」である。また、中君にとつては大君の形見であり、横川僧都の母尼君や妹尼君からは亡き娘の形見としてとらえられるのである。まさに「人形」「形代」「形見」「ゆかり」の關係は、宇治十帖を貫く方法だといえるだろう。

小稿では、多様な視点から「身代わり」として認識され手段化される存在、浮舟の「形代」性の構造を明らかにしてみたい。形代としての浮舟造型論はすでに定説化しているが、「形代性」だけでは片付けられないもう一つの浮舟の特徴があるのではないかと思われるからである。それを私は「反形代性」と言いたいのだが、これは「形代性」の構造から浮き彫りされる。大君の人形として登場し、中君の形代性を通過して、入水のイメージを顕在化する「なでもの」となった浮舟は、結局においてはある種の異議申し立てをしているよ

うに思われる。入水の決意に至るまでの匂宮との恋、そして入水、再生、出離、最終的には自分の意志を押し通すという物語の終焉の仕方には、「反形代性」を持つ浮舟の存在が見えてくるからである。大君の死を語る段階で、大君の第一義の形代であった中君を失ってしまった（自らの仲介で匂宮に与えたことによる）薫に、大君の形見である中君の、そのまたの形代を登場させるのは、作者のいかなる意図に基づくものなのか。また、入水と同時に一応は終わったかのように思わせる浮舟の物語が、蜻蛉・手習・夢浮橋巻を新たに必要とするのはなぜなのか。もし形代性だけの浮舟を語るのならば、浮舟巻以後の三つの巻は不用だったはずである。このような観点をもって、大君から浮舟への転換過程に存在する「形代性」と「反形代性」二つの世界を持つ浮舟について考えてみたい。

なお本文引用は『新編日本古典文学全集』に拠る。

二

宇治十帖において「身代わり」という観念は、「人形」「形見」「形代」「なでもの」「ゆかり」という顕在的な語以外にも、「よそふ」「なごり」「代り」「准ふ」などの潜在的な語によって示されている。それその言葉の所有する意味の枠が微妙にずれるところがあるが

三、大筋に見受けられ重要な位置を占める形代を求める意識には、作者の何らかの思考・思想がうかがえるのではないかと考えられる。宇治十帖においての形代性というのは、物語の創作の方法のためだったのか、それとも主題と何らかの深い関わりがあったのか、だったのか。薫にとつて浮舟は大君の「人形」であると従来しばしば説かれてきたにもかかわらず、本文に拠る限り、薫が浮舟その人を指して「人形」と呼称することはない。中君の心理または視点による「人形」の語が、『源氏物語』全編を通じてわずか三例しか使用されていない「形代」の登場原因となる。

「思うたまへわびにてはべり。音なしの里求めまほしきを、かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、昔おほゆる人形^Aをも作り、絵にも描きとりて、行ひはべらむとなん思うたまへなりにたる」とのたまへば、「あはれなる御願ひに、また、うたて御手洗川近き心地する人形^Bこそ、思ひやりいとほしくはべれ。黄金求むる絵師もこそなど、うしろめたくぞはべるや」とのたまへば、(中略)「人形^Cのついでに、いとあやしく、思ひよるまじきことをこそ思ひ出ではべれ」とのたまふけはひのすこしなつかしきもいとうれしくあはれにて、(後略)

(宿木・四四八頁)

薫は宇治の邸を寺に改造するついでに故人の人形をまつりたいと語っていたのだから、Aの人形は文字通りの、大君の姿をかたどった「人形」を意味する。そしてその薫の願ひについてBの人形が思い出された上で、Cの「人形のついでに」と中君は浮舟についての

話を語り出すのである。薫のいうAの人形と中君の思うB Cの人形との意味は、後述のごとく相違するが、この時点における三例の「人形」は大君の外見を有する「にんぎよう」を意味するものである。中君から聞かされた浮舟の存在について、さらに詳しく知りたいと思う薫は、

世を海中にも、魂のあり処尋ねには、心の限り進みぬべきを、いとさまで思ふべきにはあらざなれど、いとく慰めん方なきよりはと思ひよりはべる。人形の願ひばかりには、なかかは山里の本尊にも思ひはべらざらん。(宿木・四五一頁)

と、「人形」「本尊」を作ろうとまで願っていた自分の悲しみを中君に訴えるが、ここでの「人形」の語も前述の用例と同様、大君をかたどった「にんぎよう」を意味するものであり、浮舟その人を指し示すものではない。

その後宇治を訪れて弁の尼に対面した薫は、亡き柏木や大君について話し合うが、その際、大君と中君の人柄を「心の中に思ひくらべ」(同巻・四五九頁)ていた。そしてその「ついでに」姉妹二人の話題からその異母妹浮舟の話題へと転換する。

①さて、もののついでに、かの形代のことを言ひ出でたまへり。

(同上)

浮舟の存在が薫の視点によって「形代」として意識される初場面である。かつての「人形」から「形代」へと、認識主体による変化が見られる。この「形代」の語の登場には、亡き柏木と自分、大君

と中君と浮舟について弁の尼と語り合う時点での薫の内心を考えると、八宮の三人目の姫君であり大君中君の妹であるという「ゆかりⅡ血の繋がり」の要素が大きく作用していると考えられる。前述のごとく、浮舟登場の直接的な契機は、薫の悲嘆ぶりを見かねた中君が、彼からの恋慕を避けるために亡き大君に「似た」浮舟という異母妹の存在を告げたことによる（宿木・四五〇頁）。その際の薫の「似たりとのたまふゆかりに耳とまりて」（同巻・四五一頁）浮舟によせていた関心は、初めて浮舟を垣間見た場面では、次のように描かれる。

あはれなりける人かな、かかりけるものを、今まで尋ねも知らで過ぐしけることよ、これより口惜しからん際の品ならんゆかりなどにてだに、かばかり通ひきこえたらん人を得てはおろかに思ふまじき心地するに、まして、これは、知られたてまつらざりけれど、まことに故宮の御子にこそはありけれと見なしたまひては、限りなくあはれにうれしくおぼえたまふ。

（同巻・四九三頁）

つまり、「もののついでに」話し出した浮舟の存在に「ゆかり」「故宮の御子」という要素が加わったからこそ、浮舟は「人形」ではなく「形代」として確実に認識されるのである。薫の大君への追慕に由来する中君への執心は、新たな状況を招き、形代としての浮舟の存在は、その後薫の独自のあり方に応じて展開することになる。

続いて「形代」の二例を見てみよう。

② 見し人の形代ならば身にそへて恋しき瀬々のなでものにせむ

（東屋・五三頁）

③ あやまりてかうも心もとなきはいとよし、教へつも見てん、田舎びたるされ心もつけて、品々ならず、はやりかならましかばしも、形代不用ならまし、と思ひなほしたまふ。

（同巻・九九頁）

「もののついでに」登場してきた浮舟の運命は、薫の歌である②の用例によって、「形代」から「なでももの」へと一層強調されていく。歌語としての「形代」に内在する意味は明らかではないが③、薫と中君の対話の内容によって人形として語り出され、身代わりの人、かたしろ、なでもものの意味に転換されていく中に、形代としての浮舟が誕生するわけである。「形代」という語が持つ二重三重の意味が、浮舟の「なでももの」としての運命をたどらせる。物語の言葉が物語の論理および方法を領導するとした秋山虔氏の評言と、森一郎氏の「呼び方、呼称によって人物の存在性が形象化される」という指摘が想起される④。

薫の心内語である③の用例については、浮舟を宇治に据え置いてからも、大君と異なる浮舟の「あまりおほとき過ぎたる」（同巻・九六頁）性格を「さうさうしう思」いながらも、浮舟を大君像に代わるまぎに生きた形代として認識しようとするものである。「形代」ならば、「なでももの」になり得ると思う薫は、身と心を慰め得る要素を浮舟に求めるのであり、「形代」とはそういった条件を有することになる。

こうして「同じゆかりなる人」として大君から中君へ、中君から浮舟へと形代の論理は進行していくのだが、ここで、数多くの人の

視点や主観による「人形」「形見」「形代」浮舟を整理してみることにしよう。

浮舟は、まず中君にとっては亡き姉大君の形見である。両親と姉を亡くした中君にとって浮舟は異母妹とはいえたった一人の身内だった。しかもその浮舟は大君に瓜二つで、故父宮にも似通っている。そんな浮舟を見て「いとよく思ひよそへられたまふ御さま」(東屋・七二頁)と思った中君は、浮舟のことを薫に語る。中君は言い寄ってくる薫のわずらわしさから浮舟を思い出し、形代性の自分の存在をみごとに逆用したのである(宿木・四四八頁)。そこから大君によく「似る」浮舟へと話題は転化していった。また、入水による失踪後の浮舟は、句宮により形見として思われたり(蜻蛉・二一九頁)、薫と母君には「過ぎにしなごり」(同巻・二三八頁)となる。また娘を亡くして悲しんでいる小野の妹尼にとっては、故姫君の形見として現れる(手習・三〇〇頁)。浮舟にはゆかりもなければ容姿も似ていないが、観音様の導きと考え、娘の代わりとして限りなく愛情を注ぎ、自らも慰められていく。なお、浮舟の異父弟である小君の存在も薫にとって浮舟の形見である(夢浮橋・三九二頁)。句宮にとっても浮舟の形見となる人物がある。侍従と宮の君である。句宮は浮舟の失踪後、彼女に仕えていた若い侍従を可愛がる。行き場を失った浮舟への贈物も彼女に与え、共に浮舟を偲ぼうとした(蜻蛉・二二八―九頁、二六一頁)。また浮舟の死後(実は死んでなかったが)夕顔を失った光源氏のように、悲しみを慰めてくれる相手を探し、父親同志が兄弟であることから浮舟の形見になりうるかとも思い、宮の君に目をつけていた(同巻・二六三頁)。

このように、数多くの人の視点や主観による「形代」浮舟の存在

が分かるわけだが、「形代」という語が使われているのは、薫にとつての大君の身代わりの人、浮舟の場合だけだった。何故この場合にのみ「形代」という語が用いられているのか。また「形代」ではなく「形見」となる中君は薫にとつてどういった意味を持つ存在なのだろうか。

大君存命中は勿論、大君の死の直後までは中君を恋の相手としなかった薫は、中君を前にしても「下の心は、身をわけたまへりとも移ろふべくはおぼえざりし」「慰さむ方なくて」(総角・三三〇―一頁)といった具合だった。しかし、大君の死による哀傷に伴い次第に「いみじくものあはれと思ひたまへるけはひなど、いとうおぼえたまへるを、心からよそのものに見なしつると思ふに、いと悔しく思ひぬたまへれど」(同巻・三五六頁)とあるように、薫は中君に句宮を導いたことを「みづからの過ち」として後悔するのである。中君への自分の横恋慕を「誰がためにもあちきなくをこがましからむ」(早蕨・三五一頁)と危惧しながらも、中君が大君に似ていると意識している薫にとつて、中君は「ただ、かの御ゆかりと思ふに、思ひ離れがたきやかし、はらからといふ中にも、限りなく思ひかはしたまへりしものを、いまはとなりたまひにしはてにも、とまらん人を同じことと思へとて」(宿木・三八八頁)とあるように、たった一人残されている八宮の「ゆかり」の姫君なのである。大君の死による恋の対象の喪失のため、薫の恋心はさらに反転し、中君への執着はついに「思ひ離る」ことができなかった。「おほかたの御後見は、我ならではまた誰かは」(総角・三四一頁)と思った後見役薫の心内には、後悔と執着の思いが複雑に交錯していたのである。

薫の「飽かぬ昔のなごり」(早蕨・三五一頁)を求める「形代性」

はここから胎動する。形代となるには、その本となる現人とのゆかりは勿論、それ以上に「似る」ということが重要な意味を持っていることはよく言われている^三とおりである。これは薫の人形を求めた「昔の御けはひに、かけてもふれたらん人は、知らぬ国までも尋ね知らまほしき心あるを」(宿木・四六一頁)という台詞を見ても言えるだろう。薫にとつて身代わりという意味の側面においては、浮舟と中君とは区別を持たないが、容貌の相似の問題において、中君は形見と思われながらも「なかなか何こともあさましくもて離れたりとなん、見る人々も言ひはべりし」(宿木・四五〇頁)とあるように、大君に似てはいなかったのである。これに対し、浮舟は「あやしきまで昔人の御けはひに通ひたりし」(同上)人であったのである。

このように見てくると、浮舟が薫の「形代」となるには、「似る」という条件はいうまでもなく、「まことに故宮の御子にこそありけれ」と喜ぶ薫にとつて、八宮の「ゆかり(縁) 血の繋がり」(宿木・四九三頁)であることが重要な要素であったことがわかる。「山里のなぐさめと、思ひ掟てし心あるを」(浮舟・一〇七頁)と薫のいうとおり、薫の慰めのためのものであった浮舟は、大君によく「似た」像に「代わる」(東屋・四七頁)ものとしての「人形」、と同時に大君への執着を破り流す形代として「なでももの」となるべき運命を生きられることになるのである。

では、このような浮舟の「形代性」は、物語の中でいかなる意味をもつことになるのだろうか。

三

元来、形代の発想は古代の神話的な基盤をもつものである^六。この形代の発想が、『源氏物語』の中では、転じて本物に擬せられるべきもの、身代わりの意味で用いられている。形代というのが人の身代わりとして用いられるのは、実は『源氏物語』以外に類例を見出せない。『源氏物語』以前の作品を調べて見ても「人形」「なでももの」を「身代わり」の意味で用いた作品は皆無であった。そして「人形」と同義語とされる「形代」が「身代わり」の意味で使用されているのは『狭衣物語』だけであった。『源氏物語』に大きな影響を受けた作品とされる『狭衣物語』の巻四には、主人公狭衣が宰相中将の妹君に逢い、理想の人である源氏宮の容姿に似ていることを喜ぶ場面がある。ただし、形代という言葉は二度使われてはいるものの、これは形代を求める意識ではなく、結果的に容貌の似た女性と巡りあったという形式を取っているだけである。『竹取物語』『宇津保物語』『落窪物語』の各先行する物語についても、かぐや姫、あて宮、落窪の君、各女主人公にあたるような女性に「形代」性は見当たらない。そうすると、つまり断定はできないまでも、形代の方法は、日本古典文学作品に見る限り、『源氏物語』に初めて用いられているといえる。繰り返すが、身代わりとしての「形代」という方法は、紫式部の独自のものだったといえる。そして、この「人形」「形代」という語で表されている浮舟という人物にこそ、作者の考えが込められているのではないだろうか。

ここで、神話的民俗学的な発想から解き放たれ、物語における「形代」としての浮舟自身の役割、浮舟の存在論的な問題を考えてみたい。

浮舟を指し示す「人形」「形代」「なでもの」の語が大君の身代わりとしての意味のみならず、罪を背負って宇治川に入水するという将来の運命の象徴であることを指摘したのは森岡常夫氏だった¹⁰。また、これを踏まえて浮舟は「女の寄る辺なき身の上の象徴であるとともに、罪ある人の形代として、その罪過を背負う人形をのせて波間を漂う、浮き舟の連想が強く働いている名でもあった」といい、「贖罪の女君」¹¹としての浮舟を語る論もある。このような浮舟造型論はすでに定説化しているようである。しかし、「形代」「なでもの」というものは、そのことばの意味するところより、その役割のほうに存在性をもつものである。「贖罪性にとらえられすぎるのは「人形・形代」の包括性を意味的に限定しすぎることになる」とし、形代としての浮舟の役割をその贖罪性のみではなく、人の安全を確保するための手段でもあることに焦点をあてている日向一雅氏の見解¹²のとおり、身代わりとして浄化作用を持つもの、というのが形代の原義としてのとらえ方なのである。「人の安全を確保するための手段」というのは、広義においての形代の意味であろう。そして、日向一雅氏の説く「罪や穢れなどを転移して流した（祓えつ物）」というのは、即ち人間の安全を確保するための手段であった」というところから浮舟の姿を読みとるのならば、「形代」から「祓えつ物」へと、浮舟の辿る過程には、女の生あるいは人生の、ある種の「安全性確保」という作者の意図的希望があつたとも考えられるのではないだろうか。ここでいう「安全性確保」というのは、宗教的意味での「救済」のことと解釈すべきであろう。すなわち、大君の背負った罪は「浮舟」という「形代川なでもの」によって、浄化され、安全性は確保されるはずである。そして、結局においては人々は浄

土思想の論理により「救済」されるはずだったのである。

しかし、後述のごとく、物語の最後まで「救済」の問題は疑問に付される。作者は浮舟の「形代性」に与えられている浄土思想の論理を仏教的認識論に基づいて思索しつづけていくために、形代性とは異なるもう一つの性格を「浮舟」に与えているのである。「形代性とは異なる」もう一つの浮舟の特徴、それをこれから「反形代性」と称するが、巻名の示すように、浮舟が中心となる「浮舟巻」から、その「反形代性」は表れる。

四

投身を決意して「わが世つきぬ」と書き付けて邸を抜け出そうと窺っている浮舟巻の終り部分（一九六頁）で、浮舟の物語は一応は終っているかのように思わせる。しかし作者は新しい構想の中、蜻蛉・手習・夢浮橋巻を組み立てている。ここでは、従来言われているような、入水による失踪に至るまでの浮舟の受動性・主体性のなさ¹³や「人形」であるがゆえに没個性であった¹⁴既存の浮舟から脱するもう一人の浮舟が浮上する。何故作者は浮舟を蘇らせるような構想を新しく立てたのだろうか。この構想は、最初八宮の姫君は二人であつたが、その後新しく作り出された異母妹の存在が、宿木巻から浮上してくることに似ているが、浮舟物語はここで大きな断層を見せる。環境の中に埋もれた前半の浮舟と、主体性に目覚めた後半の浮舟の生の軌跡には「形代性」と「反形代性」の二つの世界が存在しているからである。つまり、浮舟は薫にとつての単なる「形代」の女君ではなかった。単なる身代わりとしての「形代」

であつたならば、似ているとかあるいは血縁関係があるとかの話筋で、薫を、あるいは物語を充分満たせなくてはすである。浮舟は、入水・再生・出離の生を辿る浮舟独自のあり方をめざしていくわけで、浮舟を「形代性」の領域に安住させておくわけにはいかない。「形代性」の領域を離脱し、主人公の相対化していく^(三)過程を描くのが、浮舟巻以後の三つの巻なのである。

浮舟の生の転換は、匂宮に出逢つてしまったことから決定的になる。匂宮との出逢いは浮舟にとって「形代性」の存在領域を越え、「反形代性」の生への転換となる契機となつたのである。それはまるで薫の視点からの「形代性」を振りはらうかのようにして描出しているのである。振りはらわれるべき「形代性」とは、薫と浮舟との心の断絶の中に胚胎していたと考えられる。

そなたになびくべきにはあらずかしと思ふからに、ありし御さまの面影におぼゆれば、我ながらも、うたて心憂の身やと思ひつづけて泣きぬ。(中略)など、朔日ころの夕月夜に、すこし端近く臥してながめ出だしたまへり。男は、過ぎにし方のあはれをも思し出で、女は、今より添ひたる身のうさを嘆き加へて、かたみにもの思はし。
(浮舟・一四四―一五頁)

薫は浮舟を通して「過ぎにし方のあはれ」を懐かしんでおり、浮舟は浮舟で薫と同席していながらも恋情ではなく、二人の板挟みになつた自分の「身のうさ」を嘆いている。「男」と「女」を語る場面だが、その心と心はすでに断絶していて、薫と浮舟の関係が象徴的に表されている。薫は自分の目の前にいながら匂宮を思う浮舟とい

う他者^(三)と同居していたのであり、彼はあくまでも亡き大君を偲ぶよすがとして浮舟を見ていたにすぎない。二人の思いはそれぞれ擦れ違つているのである。

だからといって、浮舟が單純に匂宮のほうへ走ろうとしたわけではない。浮舟は自分の置かれていた立場を的確に認識していた。

ことにいと重くなどはあらぬ若き心地に、いとかかる心を思ひもまざりぬべけれど、はじめより契りたまひしさまも、さすかにかれはなほいともの深う人柄のめでたきなども、世の中を知りにしはじめなればにや。かかるうきこと聞きつけて思ひ疎みたまひなむ世には、いかでかあらむ、いつしかと思ひまどふ親にも、思はずに心づきなしこそはもてわづらはれぬ、かく心焦られたまふ人、はた、いとあだなる御心本性とのみ聞きしかば、かかるほどこそあらめ、また、かうながらも、京にも隠し据ゑたまひ、ながらへとも思し数まへむにつけては、かの上の思さむこと、よろづ隠れなき世なりければ、あやしかりし夕暮のしるべばかりにだに、かうたづね出でたまふめり、まして、わがありさまのともかくもあらむを、聞きたまはぬやうはありなんや、と思ひたどるに、わが心も、取ありてかの人に疎まれたてまつらむ、なほいみじかるべしと思ひ乱るるをりしも、
(中略)「なほ移りにけり」など、言はぬやうにて言ふ。
(一五七―一八頁)

入水を決意するほどの浮舟の苦悩は、匂宮に一段と恋心の募る思いの中でも、匂宮との関係の発覚により薫に「疎まれたてまつらむ」

ことを自覚していたことに起因するといえよう。いみじく「思ひ乱」れていたのは、「いともの深う人柄のめでたき」薫から離れるべきではないと、自分の置かれた立場を認識していたからである。にもかかわらず、「いとあだなる御心本性」の匂宮へと心が移ってしまつた、匂宮との恋の熱情に浮舟は悩んだのである。

ところが、匂宮の浮舟への関心は単なるいつもの好色心によるものであつて、特別なものでもなかつたが、浮舟が中君の妹とまでは知らないうちに「ただ、そのことを、このころは思ひしめたり」（一六頁）と夢中になつていく上に、薫との競争心にもあおられ「宇治へ忍びておはしませんことをのみ思しめぐらす」（同上）と特別なものへと発展していく。この恋は、薫の浮舟への思いが「過ぎに仕方のはれ」になぞらえ、「恋しき人によそへられたる」（一四五頁）「形代」性でしかなかったのとはまったく対照的である。「香のかうばしきことも劣らず」（一二四頁）と薫の他人にはない特徴さえ真似した匂宮は、薫より浮舟の心を奪ひ取つてしまうことになる。逢瀬の後、「女、いとさまよう心にくき人を見ならひたるに、時の間も見ざらむに死ぬべしと思し焦がるる人を、心ざし深しとはかかるを言ふにやあらむ」（一三〇頁）と薫と比較して匂宮の心をより深いものだと思ひてしまう「女」は、初めて「形代性」を脱した、浮舟のことであつたのである。都に戻つた薫の、浮舟を偲ぶ「衣かたしき今宵もや」（二四七頁）の吟誦に焦慮する匂宮は、高く降り積もつていく雪の中に宇治を訪ねて行く情熱を見せる。これに対し、ひたすら「あさまじう、あはれ」（二四九頁）と感動する浮舟は、匂宮との恋にさらなる絶頂を目指す。浮舟という巻名ともなつた匂宮と浮舟の「年経ともかはらむものか橋の小島のさきに契る心は」と「橋の小

島の色はかはらしをこのうき舟やゆくへ知られぬ」との贈答歌（一五一頁）には、絶頂に達した恋があり、ここにはもはや「形代」としての浮舟の存在はなくなっているのである。

匂宮との恋は、浮舟にとつて、脱「形代性」の経験だつたといえる。この「脱する」過程は、登場人物と組み合わせられた物語世界の主題的図式と相關している。匂宮の色好みが浮舟に向かつた時には、六の君や中君への情熱とは異なる新しい物語の方途が看取されるのである。宇治十帖という第三部の物語は、物語内部における時空間の対位的構図^{〔四〕}を基盤としている。その対位する世界はまず宇治と都という空間とともに、薫と匂宮の人物設定にある。八宮の姫君たちの人生に切実に関わる人物として、薫という八宮の精神的風土に行き通う法の友と、八宮の位境とは相容れない現世の栄華権勢に支えられる皇統の人匂宮が対位的に宇治に登場している。八宮とその姫君たちが対峙したものが都の貴族の世界であつたという意味においては、匂宮は八宮一家にとつて「反世界―都の象徴」であつたのである^{〔五〕}。宇治の物語的時空の反世界的人物である匂宮は、「いとすぎたまへる親主」（椎本・一七六頁）として八宮や大君中君の意識にかたくなに堅持されていた。「おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな」（同巻・一八五頁）と八宮が懸念を表明したのは、現実の中君に接近してきた匂宮を意識してのことであつたし、また大君が中君の身を案じて病没したことは、八宮一家にとつての匂宮の存在性が問われる最も象徴的な意味を有する事柄である。大君や中君に堅持されていた「反世界の人」匂宮の色好みも浮舟と向かいあつた時、浮舟もまた「反規範的」世界を辿ることになるのは、物語の方法ともいえるのではな

いだろうか。黨との競争意識がモチーフとなつて始まつた匂宮の好み^{ニミ}は、浮舟をして宇治の時空を「脱する」ことを求めたのである。つまり、「いづくにか身をば棄てむと白雲のかからぬ山もなくぞ行く」(浮舟・一九二頁)とまで極まつた浮舟への匂宮の狂熱的な恋は、結局においては、「形代性」の浮舟に入水を決行させる破綻的なまでの脱「形代性」を経験させたのである。

こうして大君の「形代」として位置づけられていた浮舟は、黨の「形代性」を持つ自分自身に反発でもするかのようにして、匂宮との恋による脱「形代性」の自分を読者の前に投げつけたのである。「東屋巻に次ぐ浮舟巻は、脱(形代の人)を苦悩する浮舟その人がかたどられてゆき、再生後に至つては文字通り形代であるおのれを川の流れにかき流してしまつた以上、もはや形代の人でありえない」^(一)こという藤井貞和氏の読みがある。藤井貞和氏の説く「(形代の人)を脱する」行動というのは、匂宮との恋愛行為であつて、その苦悩の結果入水を決意したのであり、その「形代の人」を脱する一連の行動に「反形代性」の浮舟が存在するのである。浮舟の取つた一連の「脱形代性行為」に見えてくる浮舟の性格「脱する」過程を経て獲得しえた浮舟の特徴とは、まさに「反形代性」であつた。その過程には浮舟の生の大きな逆転あるいは転換が見てとれるからである。

確かに、匂宮との恋は、浮舟の存在が大君の形代ではないことを明らかにする行為であつた。だが、しかしここに注目しなければならぬ一つの錯綜した浮舟の存在が見えてくる。結果論的な言い方だが、浮舟は「形代性」を脱し、「反形代性」を獲得はしたものの、結局のところ自分を「なでもの」として川に流してしまつたのであ

る。これは、視点を変えて認識の主体を黨に据え直すと、神体そのものとしての元来の「形代」浮舟に戻つたことになる。浮舟の入水を知つた黨は「人形とつけそめたりしさへゆゆしう、ただ、わが過ちに失ひつる人なり」(蜻蛉・二三六頁)と思ひ、中君と「戯れに言ひなし」た人形・形代・なでものの意味(東屋・五三頁)が、浮舟に入水されてから、思ひ合わせられるのであつた。つまり、匂宮との脱「形代性」を誘発した浮舟の行為は、結果的には、黨には、浮舟の「形代性」の再確認的な意味をもたらしたのである。とすると、浮舟は大君の人形として黨の大君に対する執着を破り去るものであつたということになるだろうか。

次の引用は、浮舟の再生後、宇治の人々との因縁を反芻する黨の心であり、浮舟の「形代性」はこのように再確認される。

山のふところより出て来た人々の、かたほなるはなかりけるこそ、この、はかなしや、軽々しやなど思ひなす人も、かやうのうち見る気色は、いみじうこそをかしかりしか、と何ごとにつけても、ただかの一つゆかりをぞ思ひ出でたまひける。あやしうつらかりける契りどもを、つくづくと思ひつづけながめたまふ(後略) (蜻蛉・二七五頁)

黨にとつて「はかなしや、軽々しや」と難じてもきた浮舟が、入水による浮舟不在という事柄を経て、「かたほなるはなかりけるこそ」の大君・中君に一步近付くことになつたのである。匂宮との恋の板挟みで苦悩し、おのれを「なでもの」にしてしまつた浮舟は、逆説的な言い方だが、「形代性」を拒否したことにより、一層大君に

同化していき、登場当時の「形代性」に近付いていく存在となったのである。そして浮舟は、大君・中君と同じく「かの一つゆかり」の存在として薫の中に生きつづけていく。「薫にとつて浮舟は、大君の形代以上でもまた以下の存在でもない」^{二六}という増田繁夫氏の読みに賛同できるわけである。

このように、浮舟巻での脱「形代性」の浮舟は、「なでもの」となりおのれ自身を流したことに、蜻蛉巻では「形代性」への復帰をもたらしたわけであるが、入水の前後においての浮舟の自覚と自省は、さらなる変化を見せている。浮舟巻での匂宮へ傾斜していた恋は、自覚の過程をへて、手習巻での自省へつながつていくのである。再生の後「昔よりのこと」を思いつづけている浮舟は、「形代性」と「反形代性」の二つの世界で揺れ動いているように思われる。

昔よりのことを、まどろまれぬままに、常よりも思ひつづくるに、いと心憂く、親と聞こえけん人の御容貌も見たてまつらず、遙かなる東国をかへるがへる年月をゆきて、たまさかにたづね寄りて、うれし頼もしと思ひきこえしはらからの御あたりも思はずにて絶えずき、さる方に思ひさだめたまへりし人につけて、やうやう身のうさをも慰めつべききはめに、あさましうもてそこなひたる身を思ひもてゆけば、宮を、すこしもあはれと思ひきこえけん心ぞいとけしからぬ、ただ、この人の御ゆかりにさすらへぬるぞと思へば、小島の色を例に契りたまひしを、などてをかしと思ひきこえけん、とこよなく飽きにたる心地す。^{二七}はじめより、薄きながらものどやかにものしたまひし人は、このをりかのをりなど、思ひ出づるそこよなかりける。かくてこ

そありけれと聞きつけられたてまつらむ恥づかしさは、人よりまさりぬべし。さすがに、この世には、ありし御さまを、よそながらだに、いつかは見んずるとうち思ふ、なほわろの心や、かくだに思はじ、など心ひとつをかへさふ。

(手習・三三二―三頁)

「さすらへぬる」流転の運命をふりかえる「今の浮舟」には、薫と匂宮の双方についての明確な認識がなされている。浮舟巻での虚像性を持っていた薫への思いは、蜻蛉巻での「形代性」への復帰過程を余儀なくされた浮舟にとつて、逆転していることが分かる。匂宮との過去は「をかし」と思われ「飽きにたる心地」がする一方、薫への恋情は「はじめ」の時にさかのぼり据え直されているのである。丸山キヨ子氏の評言どおり、「浮舟は、すでに匂宮については、そのへあはれ」を相対化しえていた^{二八}のだが、転換されている薫への「あはれ」は、浮舟を再び「形代性」の根源へと導いてしまう。匂宮との恋を否定し、自分の中に内在する愛の破綻、愛の無常など「心の憂い」の原因をみつめなおす浮舟が、薫に対しての「恥づかし」さにこだわっているのである。取り逃した安らかな生活への憧れが、かつての自分を反省させ、元の「形代性」の自分に戻そうとしている一面がみえる。だが、しかし、浮舟の錯綜した心内は結局「なほわろの心や、かくだに思はじ」と、薫への恋情をも断ち切ろうとする。この後、浮舟は男女の恋情に対しての永遠の別れ、出離を決心するのであった。

ここには過去を対象化し、過去への自覚的な別れをつけ、「形代性」の自分から脱出しようとする浮舟の、また異なる「反形代性」

がうかがえる。ここでの「反形代性」というのは、人生自体への自省を経て、過去の自己のあり様から離脱しようとする、一段と成熟した浮舟の内面といえる。再生の後、浮舟は自分を取りまくすべての環境に対しかたくなに抵抗しつづけている。「いとむつかしうもあるかな、人の心はあながちなるものなりけりと見知りにし」(手習・三三二頁) かつての匂宮との体験を通じて、極限を通り抜けてきた不動の「反形代性」を獲得しようとするのである。すなわち、尼君を含め、自分を再びかつての「形代性」に取り込もうとする中将の懸想に対しても「なほ、かかる筋のこと、人にも思ひ放たすべきさまにとくなしたまひてよ」(同巻・三三二―三三三頁)と願ひ出る様で、浮舟は「よろずにつけて世の中を思ひ棄つ」(同巻・三三三頁)新しい自分を見せようとしているのである。匂宮・中将への拒否、さらに「かくだに思はじ」と「心ひとつをかへさふ」薫への、まだ相対化していない思いでさえも、いわば「反形代性」の自己への支えなのである。男性一般へ、そして、「よろずにつけて」「世の中を思ひ棄つ」るのは、すべて外界の力に対峙して自分の「反形代性」を守りとおそうとする、浮舟の「拒否」の表明なのである。

ついに出家を遂げた後に、手習の行為に伴う浮舟の独詠歌は、浮舟自身の内に回帰する「反形代性」の告白と考えられる。

「亡きものに身をも人をも思ひつつ棄ててし世をぞさらに棄てつる

今は、かくて、限りつるぞかし」と書きても、なほ、みづからいとあはれと見たまふ。

限りぞと思ひなりにし世の中をかへすがへすもそむきぬるかな

同じ筋のことを、とかく書きすぎびたまへるに(後略)

(手習・三四一頁)

入水と出家という極限の体験は、いわば世を「棄てつる」ことであった。「棄ててし世」をさらに「棄てつる」「二度の「拒否」にこそ、浮舟の「反形代性」の軌跡がうかがえるのではないだろうか。入水直前「わが世つきぬ」と辞世の歌にあった世の中を、浮舟はさらに繰り返して「そむきぬる」ことを訴喚するのである。「同じ筋のこと」「拒否」のことを告白する浮舟には、もはや観念的な生き方をしていた大君の影は存在しない。大君の「形代」として登場してきた浮舟は、再生と出家という極限からの転換により、さらなる「反形代性」を生きて行こうとするのである。そして、浮舟は「もとの御契り過ちたまはで、愛執の罪をはるかきこえたまひて」(夢浮橋・三八七頁)という僧都の手紙さえ鵜呑みにすることなく、また、尼君たちに「世に知らず心強くおはしますこそ」(同巻・三九〇頁)と批判されるのも、「今日は、なほ、持て参りたまひね。所違へにもあらむに、いとかたはらいたかるべし」(同巻・三九三頁)と、薫との交渉を拒否し通すのも、浮舟の「反形代性」の生き方を語るものといえよう。

五

身代わりの方法として宇治十帖に登場してきた「形代」の語は、

その「言葉」のもつ重層的意味の展開によって、浮舟の一生を運命的なものにした。原語における「形代」は、身の災いを移し、禊・祈禱の時に水に流すものである。これは浄化の働きとともに、生の安全を確保してくれる役割を担うものであった。第三節で述べたように、安全性の確保というのが宗教的意味での「救済」のことならば、大君や薫をはじめ人々は浮舟によって救われるはずであり、『源氏物語』は横川僧都の天台浄土教的思想状況において物語を結論づけなければならぬ。しかしながら、物語の最後まで浮舟の救済・安全性は確保されていない。

出離の問題や救済の課題においてその帰結を問う論議はこれまでもいくども試みられてきた^{二〇}が、ここに依然としてその課題はつきつけられる。浮舟の「反形代性」には、浮舟自身の救いさえ約束されていないからである。『源氏物語』が夢浮橋巻で終わったことそのものの意味を考えると、残された問題は、約束されていない浮舟の救済^{二二}あるいは「愛執の罪」を含む人間の内面的罪の起源^{二三}などを解決してくれる主体ということになるだろう。関根賢司氏は、宇治十帖では「男を越え、そうすることによって、人間を、世界を越えようとする意志」が明確になるといい、物語の主体を「彼岸からのまなざし」^{二四}と見なした。ここでの「彼岸」を「此岸」に改めたのが、小稿の「浮舟の〈反形代性〉」論である。宇治十帖の主体は、あくまでも此岸からのまなざしをもって、「男を越え、人間・世界を越えようとする」のであり、その意志が浮舟の「反形代性」に表れていると思うのである。

物語の思想がたどりついたところは、浮舟の形代性ではなく「反形代性」であった。浮舟の運命的な生において、「形代性」は、「反

形代性」を主張するためのものであったといえよう。作者は「反形代性」の浮舟を、作品の思想の担い手としたのである。二度にわたる「棄てつる」世とはいかなる「世」であり、繰り返し「そむきぬる」その「拒否」の意味するところは何だろうか。「拒む女」大君から、さらなる「拒否」を受け継ぐ浮舟に、その転換の必然性に、作者は自身の思想を展開したものと考えるのである。

「宇治十帖で、われわれが出逢うのは、人生ではなく、人生の認識であり、作者の思想であって、これがモティーフの発見ということの意味にはかならない」^{二五}と述べた先学もあるが、私は、人生の認識の問題あるいは認識の世界を越え出る作者の自らの内的課題が浮舟という人物に託されている、ということしかできない。浮舟に託されている作者の内的課題とは、浮舟の「反形代性」に表れているのはいうまでもない。第四節で述べたように「反形代性」を定義づけるのは「男性と世」に対する「拒否」のことであった。「拒否」する認識の世界に存在する浮舟と、作者の世に対する認識は何らかの関連性があるに違いない。今後、さらにその基盤を問い直すべく、「拒否」否定の問題と係りつつ、作者の世に対する認識体系を解明していきたいと願っている。

〈注〉

(一)例えば、驚山茂雄氏は「源氏物語の二問題」(『日本文学』二八巻、一九七九・八)の中で「形代」を求める意識の認められるものとして、夕顔―末摘花、夕顔―玉鬘、備兵部卿宮の故北の方―真木柱、女三宮―女二宮、横川僧都の妹尼の亡き娘―浮舟などの関係を挙げている。また、上坂信男氏は『源

氏物語の思惟序説」(笠間書院、一九八二)の中の「生活体験(二)——形代をめぐって——」で空蝉、夕顔、六条御息所までを形代とみる考えを示している。また、他にも、北川真理氏の「源氏物語における形代の方法——『憂し』を恐れる薫——」(『物語研究』物語研究会編、新時代社、一九八六)、島内景二氏の「竹取物語の発生基盤——その話型的研究——」(『電気通信大学学報』一九八五・二)、三谷邦明氏の「源氏物語における言説の方法」(『物語文学の言説』有精堂、一九九二)がある。

(二)「形見」とは、本文によると身代わりとしての「人形」とまでは行かないまでも、愛する人の死によって生まれた心の空虚感を埋めることが可能な人物であるように思われる。形見の条件としては、薫の視点による「形見」から考え、亡き人の血縁であること、容貌が似ていることが挙げられるように思われがちである。しかし、この二点は、本文第二節で述べているように、「形代」の条件ではあっても、形見の必須条件にはならない。中君と大君は似ていなかった(宿木・四五〇頁)。「源氏物語」の正編においても、例えば夕顔に仕えていた右近が、夕顔の死後、形見と呼ばれているが、彼女と夕顔には血縁関係もなければ似ているという話もない。また葵上の形見とされる夕霧には、母子という血縁関係はあっても「中将の、さらに、昔さまのにほひにも見えぬならひに、さしも似ぬものと思ふに」(胡蝶・一八五頁)とあるように、似ていなかったのである。そして妹尼君の故姫君の形見と呼ばれる浮舟に至っては、似てもおらず血縁関係でもない。一方、「ゆかり」の用例を見てもそのままだ「人形」に当てはまるわけではない。本文の「ゆかり」は結果として人形となった例にすぎない。鈴木一雄氏が「形見の語が人と人とのつながりに用いられる時には、きわめて「ゆかり」に近接することにもなる」(『源氏物語における「ゆかり」について』「むらさき」四輯)と述べているように、「ゆかり」と「形見」は非常に似た語句である。なお、横井孝氏は「ゆかり」

となるための条件として「容貌の相似」と「血縁関係」の二つの点を挙げている(『「ゆかり」の構造——朝顔の巻をめぐって——』(平安文学研究「五二輯」)が、やはり「ゆかり」が「人形」を決定させる要素となる時は、そこに「似る」ということが強く働きかけているようである。また、「形代」が「なでもの」になりうることにについては、東屋巻の五三頁参照。

(三)この歌は『六華和歌集』にも収められているが、他作品における歌の中の「形代」の用例は、次のとおりである。

①かたしると思ふもうしや引きとめぬ袖のわかれのよこ雲の空

(『続重槐集』三三六)

②うつすともおよばじ筆のかた代に思ひの色の姿ならずは

(『草根集』八二八九)

③にざらましむなし契の朽木がき筆限有る人のかた代

(『草根集』八二九一)

④とりかへす事だに今はかた代のくやしき波にぬる袖かな

(『逍遊集』二一八三)

歌の引用については『新編国歌大観』による。

(四)秋山虔「源氏物語の世界」(東京大学出版会、一九六四)、森一郎「形象的言語——場面空間の造型性——」(『源氏物語生成論』世界思想社、一九八六)。また、高橋亨氏の「物語の世界ではことが存在を決定する」というのも、これらに似た評言である(『存在感覚の思想』「源氏物語の対位法」東京大学出版会、一九八二)。

(五)注(二)参照。なお、上坂信男氏は「光源氏像の両面」(吉岡廣編『源氏物語を中心とした論攷』笠間書院、一九七七)の論文で、藤原師輔が北の方雅子内親王死後、妹の康子内親王を得たことや、『紫式部集』の十五番の歌の詞書にみられる姉妹の契りなどに、当時の社会及び「源氏物語」の作者に形代を求める意識がうかがえると指摘する。その際「似るがゆえに」その意識が

働くのだが、「似るがゆえに」形代的な人を求める意識は『万葉集』や『古事記』にも見られる。

○川風の寒き長谷を嘆きつつ君があるくに似る人も逢へや(『万葉集』四二五)
○天若日子の喪を弔ひたまふ時、天より降り到れる天若日子の父、亦其の妻、皆哭きて云はく、我が子は死なずて有りけり、我が君は死なずて座しけりと云ひて、手足に取り懸りて哭き悲しみき。其過ちし所以は、此の二柱の神の容姿、甚能く相似たり。故、是を以ちて過ちき。

(『古事記』上巻、一一七頁)

引用については『日本古典文学全集』による。

- (六)民俗学的な発想に基づく形代論については、折口信夫の『国文学の発生』(『折口信夫全集』第一巻、中央公論社)、『祭りと神々の世界』(NHKブックス、一九七九)、山折哲雄『水の女―禊ぎの源流―』(『物語の始原―折口信夫の方法』小学館、一九九七)参照。なお、折口の「水の女」論を継承して、宇治の民俗的位相を「伊勢と丹波をつなぐ説話の要衝地帯」であり、「賀茂川の末」が合流する「禊ぎの聖地」と規定する高崎正秀氏の「説話物語序説―その淵源としての宇治の世界への試論―」(河出版『日本文学講座』Ⅲ、一九五〇)がある。これらの事実を踏まえて、高橋亨氏は民俗学を基底とする文学的想像力の表現を重要視し、「大祓の詞で、諸人の罪をひきうけて、さいごに根の国・底の国を流離する速さすら姫は、贖罪山羊としての人形であり、流離そのものの神格化といえる。流離(さすらい)を水を中心とするイメージ群のなかでとらえ、〈罪〉とつないでしまう想像力の始源が、宇治の時空の基底となっている」とする(『宇治物語時空論』『源氏物語の対位法』東京大学出版会、一九八二)。

(七)『平安朝物語の研究』(風間書房、一九六七) 一二三頁。

(八)林田孝和「贖罪の女君」(『源氏物語の発想』桜楓社、一九八〇)二九六頁。

なお、氏の「浮舟を薫や匂宮二人の男の罪業を贖うだけでなく、光源氏の罪を贖うべく登場させられた」というところについては、近年の引用論により多くの支持を得ているようである。

(九)日向一雅「源氏物語の主題」(桜楓社、一九八二)二〇三頁。

(一〇)鈴木日出男「浮舟と中将の君」(『東京芸芸大学紀要』一九七六・二)。

(一一)注(八)の林田孝和氏の論文。

(一二)丸山キヨ子氏の論文「浮舟について―宇治十帖末尾の考察―」(『源氏物語の探求』第一輯、重松信弘博士頌寿会編、一九七四)と鴨野文子氏の論文「あはれの世界の相対化と浮舟の物語」(『国語と国文学』一九七五・三)『源氏物語兩義の糸』有精堂、一九九二所収)において「あはれの相対化」という言葉が使われているが、「あはれの相対化」というのは本節で述べるように、手習巻においては「主人公」の相対化でもあったのである。

(一三)この箇所での二人の「他者性」とは、結果論的な言い方だが、はじめから二人の関係に潜んでいたのではないだろうか。薫は浮舟と結ばれた後にも「なほ、行く方なき悲しさは、むなしき空にも満ちぬべかめり」(東屋・九六頁)と思い、「あはれ亡き魂や宿りて見たまふらん、誰によりて、かくすずるにまどひ歩くものにもあらなくに、と思ひつづけたまひて」(同上)のような有様であった。一方、浮舟にも「恋し悲しと下り立たねど」「いみじく言ふにはまさりて、いとあはれと人の思」うに違いない人柄で「行く末長く人の頼みぬべき心はへ」(浮舟・一四三頁)である、薫のすぐれた点がまるで他人事としてとらえられていたのである。

(一四)高橋亨「宇治物語時空論」(『源氏物語の対位法』東京大学出版会、一九八二)。また、広川勝美「源氏物語・宇治時空論―その基層と深層―」(『日本文学』二四巻、一九七五・一一)参照。

(一五)森一郎「源氏物語考論」(笠間書院、一九八七)二〇三頁。

(一六) 薫と匂宮二人はお互いに相手の欲望を紹介披露することにより、薫は犬君への、匂宮は浮舟への欲望の程度がアップしていくのである。この問題については「欲望の模倣」「欲望の三角形」「差異化と秩序」「同一化と暴力」「排除」などルネ・ジラルの根本原理を柔軟に駆使して、薫・匂宮・大君・中君・浮舟の相姦関係の展開と力字を、浮舟の排除による秩序の回復や男性愛に至るまで包括的に扱っている神田龍身氏の「物語文学と分身―源氏物語宇治十帖をめぐる―」（『源氏物語と平安文学』第一集、早稲田大学中古文学研究会編、一九八八）と『物語文学、その解体』（有精堂、一九九二）を参照されたい。なお、ラカンを採用した『源氏物語』宇治十帖論の成果としては、小林正明氏の「双数と法の宇治十帖」（『日本文学』三八巻、一九八九・五）がある。

(一七) 藤井貞和「形代の人―東屋・浮舟―」（『国文学』三二巻二三号、一九八七・一一）。

(一八) 増田繁夫「浮舟の出家」（『源氏物語と和歌・研究と資料』古代文学論叢第四輯、武蔵野書院、一九七四）。浮舟のもつ「形代性」には、桐壺更衣から藤壺、そして紫上という正編物語における形代の系譜とは本質的に異なるところがある。光源氏にとって、紫上は藤壺の形代、その藤壺は桐壺更衣の形代性をもつ。しかし、紫上は「ゆかり」ではあるが、「人形」「なでもの」とは表現されていない。「桐壺帝にとつても、また光源氏にとつても、形代となる姫君は故人をしのぶための単なる「人形」では決してない。それは未来に向って伸展する愛の対象であり、新しい現実の獲得であった」（大朝雄二「浮舟の登場」「文学」一九八七・一〇）が、薫にとつての「形代」とは、過去への回帰または再確認のためにすぎず、「なでもの」の語の意味が示すように、そこにはいかなる意味でも未来的な展望は存在しなかったのである。

(一九) 注（二二）丸山キヨ子氏の論文、三七〇頁。

私の思うには、匂宮の存在の虚構性は、物の怪が去り意識を回復した浮舟が匂宮と対岸の小屋に籠った過去を想起している箇所ですに表れている。「心強く、この世に亡せなれと思ひたしを、をこがましうて人に見つけられむよりは鬼も何も食ひて失ひてよと言ひつづくくどみたりしを、いときよげなる男の寄り来て、いざたまへ、おのがもとへ、と言ひて、抱く心地のせしを、宮と聞こえし人のしたまふとおぼえしほどより心地まどひにけるなめり、知らぬ所に据ゑおきて、この男は消え失せぬと見しを（後略）」（手習・二九六頁）。つまり「宮と聞こえし人」というのは「人をまどはしたる」（同巻・二九四頁）「物の怪」のことであり、この箇所では匂宮の存在はすでに否定されていると考えられる。

(二〇) 多屋頼俊「源氏物語の思想」（法蔵館、一九五二）○小野村洋子「源氏物語の精神的基底」（創文社、一九七〇）○岩瀬法雲「源氏物語と仏教思想」（笠間書院、一九七二）○前掲注（二二）『源氏物語の探究』第一輯の三篇の論文、青山なを「不用人の自覚」丸山キヨ子「浮舟について―宇治十帖末尾の考察―」武原弘「浮舟論―その人物造型の主題と方法―」が示唆に富む。または同じ「源氏物語の探究」第八輯（一九八三）所収の中島あや子「浮舟の形成―通俗問題に至る―」の注（一）には、横川僧都の通俗勸奨説と通俗非勸奨説の論文をリストアップしている。また、鷲山茂雄氏の『源氏物語主題論』（塙書房、一九八五）の第四章「夢の浮橋考」、島内景二氏の『浮舟のゆくえ』（『源氏物語の語型学』ベリカン社、一九八九）など参照。

(二一) 島内景二氏は、注（二〇）の論文において、夢浮橋巻では浮舟のイニシエーションはまだ完了しておらず、「救済さるべき救済者」として「夢の浮橋」を渡り、「山」を下りることによって、「救済さるべき救済者」としての浮舟のイニシエーションは完成するといひ、「男と女が俗世の生活の中で相互に救済し合う、という深い思想」が『源氏物語』に展開されているとする。しか

し、これは書かれざる浮舟物語の未来に対する人間存在の救済の可能性としての一つの方向提示ではあっても、浮舟の主体的位相がとらえられているとは考えにくい。なぜならば、浮舟の「反形代性」は、同じ現世に生きながらも交わりえない男女の関係を拒否したことにあり、それを認識したところで『源氏物語』は終了しているからである。

(二二) かぐや姫と同様に浮舟の罪の起源が不在であることを指摘する小林正明氏は、「最後の浮舟―手習巻のテキスト相互関連性―」(前掲注(一))『物語研究』において、浮舟の罪は『竹取物語』引用によって発生し、かつ増殖したとする。また、かぐや姫の系譜は多くの女君たちのうえにたどられてきたが、小嶋菜温子氏は、『竹取』引用を介して、光源氏の罪と浮舟の罪はパラレルにあるとし、「光源氏の罪もまた浮舟の罪の起源と見なされる」という。なお、「かぐや姫―光源氏―浮舟の罪の系譜化にあつて、ジェンダー(性差)は解体されなければならない」とし、浮舟物語に形象された〈女の罪〉の問題を語る、『源氏物語批評』第三章「かぐや姫引用―ジェンダーをこえて―」有精堂、一九九五。

(二三) 関根賢司「かぐや姫とその裔」(『物語文学論』校楓社、一九八〇)。氏は『源氏物語』の中に「かぐや姫の裔、その正系」として桐壺更衣、藤壺、紫上、宇治の大君、浮舟をあげて、その「ゆかり」の系譜の姫君たちの意志について論じる。

(二四) 吉岡曠『源氏物語論』(笠間書院、一九七二)一四〇頁。

(しん ゆみ・博士後期課程)